HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリマ・ユカギール語のSupine : 統語機能と言語接触
Author(s)	長崎, 郁
Citation	北方言語研究, 11, 17-35
Issue Date	2021-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80948
Type	bulletin (article)
File Information	NoLS11_03_017_IkuNAGASAKI.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 11: 17-35（日本北方言語学会 2021）

コリマ・ユカギール語の Supine：統語機能と言語接触

長崎　郁
（名古屋大学）

キーワード：目的節、補部節、動作名詞、ロシア語、不定形

1 はじめに

コリマ・ユカギール語には supine と呼ばれる、接尾辞 *-din*/*-tin* によって形成される動詞形式がある。本稿ではこの supine の統語機能を先行研究の記述を踏まえながら整理し、また、テキスト調査に基づき 19 世紀末以降の supine の使用に見られる変化について論じる。具体的には、supine の使用が拡大すると同時に、ロシア語との言語接触の結果と見られる新たな用法が出現したことを述べる[*1]。

2 supine の 3 つの統語機能

supine については、Jochelson（1905:399-400, 402）、Krejnovič（1982:147-149）、Maslova（2003a:178-179, 414-415, 432-434）らによる記述がある。3 者は共通して、supine に以下の (A) と (B) の統語機能を認めている[*2]。また、Maslova（2003a）は、(C) についても指摘している。

(A) 目的節（目的を表す副詞節）の述語
(B)「主動詞＋補助動詞」の構造における主動詞
(C) 補部節の述語

supine という呼び名は、ラテン語において目的節述語として機能する動詞形式を念頭に、Jochelson が最初に使ったものである（Jochelson 1905:399）。筆者は、(A) の目的節述語機能を一義的なものと見なし、動詞屈折形式に関する自身の記述の中で当該の形式を副動詞のひとつとして扱った（Nagasaki 2011、長崎 2013）。以下、本節では、2.2 節、2.3 節、2.4 節で 3 つの統合機能について概観するが、その前に、2.1 節で supine の形態的特徴について触れておく。

[*1]筆者はこれまでにいくつかの研究助成を受けながらコリマ・ユカギール語の研究を行ってきた。現在は、日本学術振興会（#19K00564（基盤研究 C、研究代表者：長崎郁）、#20K00619（基盤研究 C、研究代表者：大矢一志）、#20H01260（基盤研究 B、研究代表者：永山ゆかり））による助成を受けている。

本稿で示した筆者自身が聞き取り調査によって収集した例は、ロシア連邦マガダン州スレドニェ・カンスク地区セイムチャンとコリムスコエにおいて行った調査で得られたものである。調査では、故 Agaf'ja Grigr'evna Šadrina 氏と Dar'ja Petrovna Borisova 氏に協力していただいた。ここにお名前を記して深く感謝申し上げる。また、本稿執筆にあたって匿名査読者の先生方から非常に有益なコメントをいただいたことにも、心から感謝したい。

[*2]同系のツンドラ・ユカギール語には、コリマ・ユカギール語の supine に相当する形式がなく、与格の動作名詞が (A) および (B) の統語機能をもつ（Krejnovič 1982:147-149、Maslova 2003b:28, 77-78）。

2.1 supine の形態的特徴

supine は動詞語幹に接尾辞 *-din*/*-tin*（*-din* は有声音の後に、*-tin* は無声音の後に現れる）を付けて形成されるが、元々は 3 人称所有者標識 *-de*/*-te* と与格標識 *-(ŋ)in* を伴った動作名詞であったとされる（Jochelson 1905:399、Maslova 2003a:99）。ただし、supine では、3 人称所有者標識 *-de*/*-te* のもつ人称標示機能が形骸化し、与格標識 *-(ŋ)in* とともに 1 つの接尾辞 *-din*/*-tin* となったとされる。*-de*/*-te* は、名詞においては所有者が 3 人称であることを示し（*nume-de-ge* [house-POSS.3-LOC]「彼・彼女の家で」、*pulut-te-n'e* [husband-POSS.3-COM]「彼女の夫と」）、動作名詞などの名詞化された動詞においては名詞項が 3 人称であることを示すが、supine では、(1) のように、名詞項が 1 人称あるいは 2 人称であっても常に *-din*/*-tin* が現れるからである[*3]。なお、この言語では、述語動詞に唯一の時制標識である未来 *-te*/*-t* がなければ、原則として非未来の事態を表す。非未来は、文脈によって現在の事態として解釈されたり、過去の事態として解釈されたりするが、本稿では、聞き取り調査の際に得られた露訳、およびテキストの露訳・英訳に従って和訳を付ける。一部の非派生的動詞語幹（*kel(u)-*/*kie-*「来る」や *amde-*「死ぬ」など）、あるいは完了標識（PFV）や起動標識（INCH）を伴った動詞語幹が非未来で常に過去の事態を表すなど、語彙的アスペクトや派生的アスペクトが時制解釈に影響することもある。

(1) met kie-t'e [tet-n'e **nied'i-din**]
1SG come-IND.INTR.1SG 2SG-COM talk-SUPINE
「私は来た、あなたと話すために」 （Elicited）

動作名詞は接尾辞 *-l* によって形成される。しかし、supine にその痕跡を直接に確認することはできない。これは、*-l* が 3 人称所有者標識 *-de*/*-te* の前で規則的に脱落することの反映と考えられる。以下の、経由格の動作名詞を述語とする理由節の例 (2) と (3) を比較されたい。*-de*/*-te* を伴わない (2) では *-l* が現れ、*-de*/*-te* を伴った (3) では *-l* が現れていない。*-de*/*-te* に先行する *-l* の脱落は、*-de*/*-te* の前で子音 /l/ が脱落するという形態音韻論的な現象であり、動作名詞以外にも観察される。例えば、(4) のように、結果名詞標識 *-ōl* の末尾の /l/ は *-de*/*-te* の前で脱落し、経由格標識 *-gen* の前で保たれうる。なお、(4) に見るように、動作名詞および結果名詞におけ

[*3]表記には次の文字を使う：/p, t, s, š, t', k, q, b, d, ž, d', g, h, r, m, n, n', ŋ, l, l', w, j, i, e, a, o, u, ö/。長母音はマクロン (¯) で示す。資料として用いた文献からの引用の際には、原典の表記を可能な限りこの表記に合わせる。

グロスでは次の略号を使用する：ABL: ablative, ACC: accusative, AFF: affirmative, AN: action nominal, CAUS: causative, COM: comitative, DAT: dative, DES: desiderative, DETR: detransitive, E: epenthesis, EMPH: emphatic, FOC: focus, FUT: future, GEN: genitive, HBT: habitual, INCH: inchoative, IND: indicative, INFR: inferential, INS: instrumental, INTJ: interjection, INTR: intransitive, IPFV: imperfective, LOC: locative, NEG: negative, OF: object focus, OPT: optative, PFV: perfective, PL: plural, POSS: possessor, PROL: prolative, PROP: proprietive, PTCP: participle, RN: result nominal, RECIP: reciprocal, Rus.: Russian borrowing, SEQ: sequential, SF: subject focus, SG: singular, SIM: simultaneous, SS: same-subject converb, TMP: temporal, TR: transitive, TRANS: translative, VEN: venitive。

る 3 人称所有者標識による人称標示は義務的ではない。

(2) pasībe, pulut, [tet **qamie-l-gen**].
thank.you(Rus.) old.man 2SG help-AN-PROL
「ありがとう、おじいさん、（私を）助けてくれて」 （Nikolaeva 1989-1:116）

(3) [**žadnoŋō-de-gen**] tāt peššej-l'el-ŋā
be.greedy-POSS.3-PROL then throw-INFR-IND.TR.3PL
「（彼が）いやしかったので、（彼らは彼を）追い出したそうだ」 （Nagasaki 2005:5）

(4) jolo-do-ho, **kel-ō-de-gen** jolohude keb-e-t', erpeje
back-POSS.3-LOC come-RN-POSS.3-PROL backward leave-PFV-IND.INTR.3SG Ewen
kel-ōl-gen.
come-RN-PROL
「（彼はその人の）来た道に沿って引き返した、（その）エウェン人の来た道に沿って」
（Nagasaki 2015:28）

-de/*-te* の人称標示機能が形骸化しているため、supine は基本的には名詞項と一致することがない。ただし、極めて稀ではあるが、(5) のように、3 人称複数主語の複数性が *-din*/*-tin* の直前に現れた複数標識 *-pe*/*-p(ul)* によって示されることがある。*-pe*/*-p(ul)* は名詞の複数標識として広く用いられるが（*nume-pe* [家 -PL]「家（複数）」、*šoromo-pul* [人 -PL]「人々」）、(6) のように、動作名詞にも現れることがある[*4]。つまり、共時的に見ると、supine の形態は、この複数標識 *-pe*/*-pul* を伴いうるという点でのみ、名詞的な性格をもつ。

(5) īle end'ōn-ŋin noj-pe-gi ūj-mele [ert'ōn-get **šejre-pe-din**,
some animal-DAT leg-PL-POSS.3(FOC) make-OF.3SG bad.thing-ABL escape-PL-SUPINE
palā-din]
be.saved-SUPINE
「（彼は）一部の動物たちには足を作った、悪者から逃れるために、助かるために」
（Nikolaeva 1989-1:40, cited in Maslova 2003a:152）

(6) īle n'e=leg-u-l end'ōn-pe-le šobol'e-š-u-m
some RECIP=eat-E-AN animal-PL-INS cease-CAUS-E-IND.TR.3SG
[**n'e=lej-pe-dē-jle**]
RECIP=eat-PL-POSS.3-ACC
「（彼は）一部の共喰いする動物たちにやめさせた、お互いを食べ合うのを」
（Nikolaeva 1989-1:40）

[*4] /l/ は複数標識 *-pe*/*-p(ul)* の前でも脱落する。

2.2 目的節述語

supine を述語とする目的節では規則的に同一名詞句削除（equi-deletion – Noonan 2007:75-79）が適用されると考えられる。すなわち、目的節の主語は主節に現れるいずれかの名詞項と同一指示であり、かつ、目的節中に主語が明示されることはない。最も頻度が高いのは、目的節の主語と主節の主語とが同一指示となるパターンである（2.1 節の (1) も参照されたい）[*5]。

(7) “[leme **lew-din**] ket’ī-mek?” - mon-i.
what eat-SUPINE bring-IND.TR.2SG say-IND.INTR.3SG
「（お前は）何を食べるために、（そのフォークと皿を）持って来たんだい？ –（彼女は）言った」 （Nagasaki 2015:10）

以下の (8) では目的語 *tamun-gele*「彼を」が、(9)〜(11) では与格名詞項 *tud-in*「彼に」、*īle end’ōn-ŋin*「一部の動物たちに」、*met-in*「私に」（それぞれ「受け手」、「受益者」、「経験者」を表す）が目的節主語と同一指示である。

(8) tamun-gele jan-ŋā ubun gōrat-ŋin [počta **qon-to-din**].
that.one-ACC send-PL:IND.TR.3 other town(Rus.)-DAT post(Rus.) go-CAUS-SUPINE
「（人々は）彼を行かせた、ほかの街へ、郵便物を運ぶために」 （Nagasaki 2015:39）

(9) tud-in banka-le [lebejdī **šaqal’eš-tin**] igeje-š-telle
3SG-DAT can(Rus.)-INS berry gather-SUPINE string-PROP.CAUS-SS.SEQ
tadī-j.
give-IND.TR.1PL
「（私たちは）彼に缶を、ベリーを集めるために、紐をつけて与えた」
（Maslova 2001:146, cited in Maslova 2003a:152）

(10) īle end’ōn-ŋin noj-pe-gi ūj-mele [ert’ōn-get **šejre-pe-din**,
some animal-DAT leg-PL-POSS.3(FOC) make-OF.3SG bad.thing-ABL escape-PL-SUPINE
palā-din]
be.saved-SUPINE
「（彼は）一部の動物たちには足を作った、悪者から逃れるために、助かるために」
（= (5), Nikolaeva 1989-1:40, cited in Maslova 2003a:152）

[*5]移動とその目的としての行為は、動詞語幹に派生接尾辞 *-jī*（venitive）を付加し、統合的にも表現される。

(i) ugijel-me met tet-ul juö-jī-t.
morning-TMP 1SG 2SG-ACC see-VEN-FUT:IND.TR.1SG
「明日の朝、私はお前を見に来よう」 （Nagasaki 2015:51）

(11)　met-in　lebie-lek　[**modo-din**]　nadoŋō-l
　　1SG-DAT　land-FOC　live-SUPINE　be.necessary-SF
　　「私には土地が暮らすために必要だ」（Nikolaeva 1989-1:34, cited in Maslova 2003a:433）

目的節の位置は、以上の例から明らかなように、文中のことも文末のこともある。つまり、主節の述語よりも前に置かれることもあれば、主節述語の後に置かれることもある。

2.3 主動詞

supine はまた、存在動詞 *l'e-* を後続させて前望（prospective）アスペクト（Comrie 1976:64）を表すこともある[*6]。この場合の supine と *l'e-* は主動詞と補助動詞であって、まとまってひとつの構成素を成し、同一の節内に置かれると考えられる[*7]。その根拠のひとつとして、supine の生起位置が固定されており、常に *l'e-* の直前に現れることが挙げられる。もうひとつの根拠として、本来的には自動詞である *l'e-* が、直前の supine が他動詞であれば、それを継承して他動詞の人称・数標識をとりうることが挙げられる（Krejnovič 1982:148、Maslova 2003a:178）。(12a) と (12b) では supine の自他が異なるが、それによって *l'e-* に後続する人称・数の標識も異なることに注目されたい[*8]。ただし、(12c) のように supine が他動詞であっても、*l'e-* が自動詞の人称・数標識をとることもある。なお、(12b) に見るように、*-din*/*-tin* の末尾子音 /n/ は、補助動詞の頭子音 /l'/ に同化し、/l/ に交替することがある。

(12)　a. **šewr-ej-din**　l'e-j,　…
　　escape-PFV-SUPINE　exist-IND.INTR.3SG
　　「（彼は）逃げようとした」（Nagasaki 2015:48）
　　b. met-kele　**šar-dil**　l'e-m.
　　1SG-ACC　overtake-SUPINE　exist-IND.TR.3SG
　　「（彼は）私に追いつくところだった」（Elicited）
　　c. tudel　met-kele　**juö-din**　l'e-j.
　　3SG　1SG-ACC　see-SUPINE　exist-IND.INTR.3SG
　　「彼は私に会うつもりだ」（Elicited）

[*6]Jochelson（1905:402）は「何かを行う用意ができていること、意志があることを表す」と述べている。Krejnovič（1982:147-149）は「準備法（naklonenie gotovnosti）」と呼んでいる。Maslova（2003a:178-179）は「迂言的前望形（Periphrastic Prospective Form）」と呼び、「近接未来」「ある事態がすでに始まっており、進行中であるが、まだ完遂していないこと」「意志」を表すと記述している。

[*7]長崎（2013:44）において、筆者は *l'e-* と並んで *erd'i-*「欲する」、*lorqaj-*「できない」も supine と共起する補助動詞と見なした。しかし、これらの動詞は supine と組み合わさって、本節で述べたような monoclausal な特徴を示すことはないため、補助動詞ではなく補部節をとる動詞（2.4 節）として扱うのが妥当である。

[*8]supine から補助動詞 *l'e-* への形態的な他動性の継承が起こりうるか否かは、主語の人称によって異なる可能性がある。例えば、主語が 1 人称の場合に補助動詞 *l'e-* が他動詞の人称・数標識をとった例を資料中に見い出すことはできない。

さらに、もうひとつの根拠として、supine の目的語の格標示が、従属節における目的語の格標示の特徴を示さないことが挙げられる。コリマ・ユカギール語の主節における目的語の格標示は主格（ゼロ）、対格、具格のいずれかであり、主語の人称と目的語の人称の組み合わせや目的語の性質によってどの格をとるかが決まる（Krejnovič 1982:245-248, 253-256, 260-262、Maslova 2003a:325-338、Nagasaki 2011:237-238、長崎 2014）。例えば、主語も目的語も 3 人称の場合、目的語は必ず対格か具格のいずれかをとる。ところが、従属節では主語も目的語も 3 人称の場合、(13) のように、目的語が主格をとることが多い（2.2 節の (8)、(9) も参照）。しかし、主動詞として supine が用いられた場合、同じ条件下で目的語が主格をとることはない。つまり、主節の目的語として、（14）のように対格をとったり、あるいは具格をとったりする。

(13) [tamun **min-din**] kie-t'.
that.one take-SUPINE come-IND.INTR.3SG
「（彼は）それをとりに来た」 （Elicited）

(14) tamun-gele **lew-din** l'e-j.
that.one-ACC eat-SUPINE exist-IND.INTR.3SG
「（彼は）それを食べようとしている」 （Elicited）

2.4 補部節述語

supine を述語とする節は、補部節（complement clause – Dixon 2006、Noonan 2007）として、他の動詞の項となることもある。このような補部節は、規則的に同一名詞句削除が適用される点、文中と文末のいずれにも置かれうる点で、supine を述語とする目的節と共通する。

主節述語となる動詞は、Noonan（2007）の提案する補部節をとる述語クラスのうち、commentative（emotional evaluations and judgements）、desiderative、modal、そして manipulative なクラスに位置付けられるものがほとんどである。また、Maslova（2003a:415）には、「主節述語は補部節の表す状況の実現を含意しない」との指摘があるが、言い換えれば、補部節は非現実（irrealis）モダリティーを表すということになる。

supine を述語とする補部節は、補部節自体の主節における統語的役割から 3 つに分類することができる。

C-1

1 つ目は、補部節が主節において自動詞主語の役割を果たすものである。補部節を主語とする自動詞として、今のところ、*nadoŋō-*「必要だ」[*9]、*omo-*「良い」、*omolū-*「恥ずかしい」、*kellū-*「退屈だ、面倒だ」、*iŋlū-*「恐ろしい」が得られている。これらの自動詞では、与格名詞項（稀に所格名詞項）によって経験者が示され、それと補部節主語とが同一指示となる。(15)、(16) に

[*9] *nadoŋō-* はロシア語の形容詞短語尾中性形 *nado*「必要だ」とコピュラ動詞 *(ŋ)ō-* から成る複合動詞である。

nadoŋō-「必要だ」の例を、(17) に *omo-*「良い」の例を、(18)、(19) にそれぞれ *omolū-*「恥ずかしい」、*kellū-*「退屈だ、面倒だ」の例を示す（*iŋlū-*「恐ろしい」の例は 3.3 節の (44) を参照されたい）。(16)、(17) のように与格名詞項が省略されている場合、その指示対象は文脈から判断されることに注意されたい。

(15) met-in　nadoŋō-j　[**keb-ej-din**].
1SG-DAT　be.necessary-IND.INTR.3SG　leave-PFV-SUPINE
「私は行かなければならない」　（Elicited）

(16) [tamun-pe　nuk-telle　ajī　mieste　**nuk-tin**]　nadoŋō-j
that.one-PL　find-SS.SEQ　still　place　find-SUPINE　be.necessary-IND.INTR.3SG
「（お前たちは）彼らを見つけて、さらに（彼らの住む）場所を見つけなければならない」
（Nikolaeva 1989-1:38）

(17) [**ejre-din**]　omo-gen
walk-SUPINE　be.good-OPT.3SG
「（彼らが）歩けますように」　（Nikolvaeva 1989-2:6）

(18) tud-in　omoli-t'　[tamun　**nide-din**].
3SG-DAT　be.ashamed-IND.INTR.3SG　that.one　speak-SUPINE
「彼はそれを口に出すのが恥ずかしい」　（Elicited）

(19) tud-in　[**egie-din**]　kelli-t'.
3SG-DAT　get.up-SUPINE　be.dull-IND.INTR.3SG
「彼は起きるのが面倒くさい」　（Elicited）

C-2

2 つ目は、補部節が主節において目的語の役割を果たすものである。補部節を目的語とする他動詞には、*lorqaj-*「できない」、*lejdī-*「できる、知っている」、*omoluhī-*「恥ずかしがる」、*kellugī-*「面倒くさがる」がある。これらの他動詞では、その主語と補部節主語とが同一指示となる。以下に *lorqaj-*「できない」の例を示す（その他の他動詞の例は 3.3 節の (46)-(48) を参照されたい）。

(20) [**n'e=ohō-din**]　lorqaj-m,　[**n'e=modo-din**]
EMPH=stand-SUPINE　be.unable.to-IND.TR.3SG　EMPH=sit-SUPINE
lorqaj-m,　…
be.unable.to-IND.TR.3SG
「（彼は）立っていることもできなかった、座っていることもできなかった」
（Nagasaki 2015:46）

C-3

3 つ目は、補部節が主節において拡張項の役割を果たすものである[*10]。この 3 つ目の補部節は、同一指示関係の点でさらに 2 つのパターンに分かれる。

まず、主節主語と補部節主語とが同一主語になるパターンがある。自動詞 *erd'i-*「欲する」[*11]、*kit'ie-*「できるようになる、覚える」、*kudele-*〜*kudel'e-*「準備する」がこのパターンを示す。以下は *erd'i-*「欲する」の例である（その他の自動詞の例は 3.1 節の (27) と (28) を参照されたい）。

(21) met [tet-ul **juö-din**] erd'i-je.
1SG 2SG-ACC see-SUPINE want-IND.INTR.1SG
「私はあなたに会いたい」 （Elicited）

また、コリマ・ユカギール語には「考える」と訳すことのできる *t'uŋre ewre-š-* [thought walk-CAUS-]「思考をめぐらせる」という慣用句があるが、思考の内容が supine を述語とする補部節によって示された以下の例でも、主節主語と補部節主語とが同一指示となる。ここでは *t'uŋre* が *ewre-š-* の目的語であることに注意されたい。

(22) d'e tudel irkid'e t'uŋre-le ewre-š-u-m [**šewr-ej-din**].
INTJ 3SG once thought-INS walk-CAUS-E-IND.TR.3SG escape-PFV-SUPINE
「彼はあるとき考えた、逃げようと」 （Nagasaki 2015:63）

次に、主節目的語と補部節主語とが同一指示となるパターンがある。他動詞 *ajlī-*「禁ずる」と *qamie-*「手伝う」がこのパターンを示す。以下は *ajlī-*「禁ずる」の例である（*qamie-*「手伝う」の例は 3.1 節の (29) を参照されたい）。

(23) met emej met-kele ajlī-m [nume-get **keb-ej-din**].
1SG mother 1SG-ACC forbid-IND.TR.3SG house-ABL leave-PFV-SUPINE
「私の母は私に禁じた、家から出るのを」 （Elicited）

[*10] 2 項自動詞における主語以外の項、3 項他動詞における主語と（直接）目的語以外の項を拡張項と呼ぶことにする。Dixon（2006, 2009）は 2 項の自動詞を拡張自動詞（extended intransitive）、3 項の他動詞を拡張他動詞（extended transitive）と呼び、自動詞の 2 つ目の項、他動詞の 3 つ目の項に E (= Extended) というラベルを与えている。

[*11] 願望の表現は *erd'i-*「欲する」によって分析的に表されるほか、動詞語幹に派生接尾辞 *-ōl'*（desiderative）を付加し、統合的にも表される。

(ii) met tudel juö-l-ōl'.
1SG 3SG see-E-DES(IND.TR.1SG)
「私は彼に会いたい」 （Elicited）

3　19 世紀末以降の supine および動作名詞の使用に見られる変化

以上、第 2 節では、supine の 3 つの統語機能について概観した。本節では、テキスト調査に基づき 19 世紀末以降の supine の使用に見られる変化について論じる。その際の鍵となるのは、supine と置き換え可能な動作名詞の存在である。

3.1　supine と与格動作名詞：supine の使用の拡大

Maslova（2003a:98-99, 178）が指摘するように、目的節述語、および存在動詞 *l'e-* を補助動詞とする主動詞に現れた supine は与格の動作名詞で置き換えが可能である。目的節の述語に与格動作名詞が現れた例を (24) に、主動詞として与格動作名詞が現れた例を (25) に示す。この場合の与格動作名詞は、3 人称所有者標識を伴うことはない。

(24)　tāt　d'e　tebegej-ŋin　keb-e-s'　[**kudede-l-ŋin**].
then　INTJ　Tebegej-DAT　leave-PFV-IND.INTR.3SG　kill-AN-DAT
「そして（彼は）デベゲイのところへ出かけた、殺すために」
（Nikolaeva 1989-1:88, cited in Maslova 2003a:99）

(25)　leŋ-d-ōl'-i-t　**amde-l-ŋin**　l'e-l'el.
eat-DETR-DES-E-SS　die-AN-DAT　exist-INFR(IND.INTR.3SG)
「（彼は）お腹が空いて死にそうだった」（Nikolaeva 1989-1:62）

主節において拡張項の役割を果たす補部節の述語に現れた supine も与格動作名詞で置き換えることができる。以下の各例の a では補部節述語に supine が現れているが、b では同じ動詞の補部節述語に与格動作名詞が現れている。この場合の与格動作名詞も、3 人称所有者標識を伴うことはない。

(26)　a. tittel　[**jard'i-din**]　erd'i-ŋi.
3PL　swim-SUPINE　want-PL:IND.INTR.3
「彼らは泳ぎたがっている」（Elicited）
b. tittel　āj　[**kimd'ī-l-ŋin**]　erd'-ie-ŋi.
3PL　again　fight-AN-DAT　want-INCH-PL:IND.INTR.3
「彼らは再び戦いたがった」（Nikolaeva 1989-1:46）

(27)　a. tudel　[**jard'i-din**]　kit'ie-j.
3SG　swim-SUPINE　learn-IND.INTR.3SG
「彼は泳げるようになった」（Elicited）
b. tudel　[odul　tite　**ann'e-l-ŋin**][*12]　kit'ie-j.
3SG　Yukaghir　like　speak-AN-DAT　learn-IND.INTR.3SG
「彼はユカギール語で話せるようになった」（Elicited）

(28) a. [nume-ŋin **keb-ej-din**] me=kudel-ie-j.
house-DAT leave-PFV-SUPINE AFF=prepare-INCH-IND.INTR.3SG
「（彼は）家に向かう準備をはじめたところだ」 （Elicited）

b. [**uj-l-ŋin**] kudel-e-t'.
work-AN-DAT prepare-PFV-IND.INTR.3SG
「（彼は）仕事をする準備ができた」 （Elicited）

(29) a. met tet-ul qamie [lot'il **t'ine-din**].
1SG 2SG-ACC help(IND.TR.1SG) firewood chop-SUPINE
「私はお前を手伝った、薪を割るのを」 （Elicited）

b. tudel met-kele qamie-m [**uj-l-ŋin**].
3SG 1SG-ACC help-IND.TR.3SG work-AN-DAT
「彼は私を手伝った、働くのを」 （Elicited）

supine と 3 人称所有者標識を伴わない与格動作名詞のこのような共存は、与格動作名詞には以上の 3 つの統語機能が元々あったのだが、その中で 3 人称所有者標識の人称標示機能の形骸化が生じ、supine として再分析されたと考えれば不自然なものではない。そして、これら 2 つの動詞形式の共存は、19 世紀末に収集された、Jochelson（1900）に収められたテキストでも確認することができる。以下、Jochelson（1900）から目的節の例を (30) と (31) に、主動詞の例を (32) と (33) に、主節において拡張項の役割を果たす補部節の例を (34) と (35) に示す。(30)、(32)、(34) では supine が、(31)、(33)、(35) では与格動作名詞が現れている。

(30) met, pulut, [qoi-n numo-ŋin **šou-din**] kie-t'e.
1SG old.man God-GEN house-DAT enter-SUPINE come-IND.INTR.1SG
「私は、おじいさん、教会の中に入るために来た」 （Jochelson 1900:213）

(31) [koi-pe-n t'ubod'e-l **juo-l-ŋin**] nume jekl'in qon-ŋi.
man-PL-GEN run-AN see-AN-DAT house behind go-PL:IND.INTR.3
「（彼らは）若者たちの走るのを見に、狩りへ行った」 （Jochelson 1900:103）

(32) **amde-dil'** l'e-je.
die-SUPINE exist-IND.INTR.1SG
「（私は）死にそうだ」 （Jochelson 1900:13）

[*12] *kit'ie-*「覚える」の補部節に現れた動作名詞は所格をとることもある。

(iii) tudel [odul tite **ann'e-l-ge**] kit'ie-j.
3SG Yukaghir like speak-AN-LOC learn-IND.INTR.3SG
「彼はユカギール語で話せるようになった」 （Elicited）

(33)　nume　jekl'in　**kob-ei-l-ŋin**　l'e-i.
house　behind　leave-PFV-AN-DAT　exist-IND.INTR.3SG
「（彼は）狩りへ出発しようとしていた」　（Jochelson 1900:39）

(34)　kod'edan　pie　erid'-ie-i　[**qon-din**
Shamanixa.river　rock　want-INCH-IND.INTR.3SG　go-SUPINE
kimd'-ie-l-bon-pe-ŋin].
fight-INCH-AN-NMLZ-PL-DAT
「シャマニハ川の岩は戦い出した人々のところへ行きたがった」　（Jochelson 1900:101）

(35)　[**qana-l-ŋin**]　kudel'-e-t'.
roam.away-AN-DAT　prepare-PFV-IND.INTR.3SG
「（彼女は）移動する準備ができた」　（Jochelson 1900:22）

ただし、テキストの用例を収集年代を考慮して検討すると、19 世紀末以降、少なくとも目的節述語や主動詞における与格動作名詞の使用は次第に縮小し、それに替わって supine の使用が拡大してきている様子が観察される（拡張項の役割を果たす補部節の用例は年代を問わずごく僅かしかなく、用例数を比較することはできない）。以下の表 1 を見られたい。

表 1　目的節述語および主動詞としての supine と与格動作名詞の用例数

	目的節述語 supine / 与格動作名詞	主動詞 supine / 与格動作名詞
19 世紀末	11 / 7	21 / 12
20 世紀半ば以降	110 / 6	40 / 2

19 世紀末に収集されたテキスト（Jochelson 1900）と 20 世紀半ば以降に収集されたテキスト（Nikolaeva 1989、Maslova 2001、Maslova 2003a、Nagasaki 2015）を比べると、supine が現れる割合は、目的節述語で 61%（18 例中 11 例）から 96%（116 例中 110 例）、主動詞で 64%（33 例中 21 例）から 95%（42 例中 40 例）と増えており、逆に、与格動作名詞が現れる割合は減っているのである。

なお、Jochelson（1900）には、(36) のような目的節の例が 1 例ある。この例は同一名詞句削除が適用されていないという点で他の目的節の例とは異質なため、表 1 には含めていない。

(36)　[t'at'a-gi　**moro-d-in**]　tude　al'a　poni-m.
elder.brother-POSS.3　put.on-POSS.3-DAT　3SG:GEN　near　put-IND.TR.3SG
「（彼女は）兄が履くように（その靴を）彼のそばに置いた」　（Jochelson 1900:45）

比較できる例がないため難しいが、筆者は、同一名詞句削除が適用されていないということから、この目的節における述語動詞は、グロスに示したとおり、3 人称所有者標識により主語

の人称が標示され、それに与格が続いた動作名詞として分析できるであろうと考えている。ただし、類似の例は Jochelson（1900）だけでなく、20 世紀半ば以降のテキストにもなく、また聞き取り調査でも得られていないため、さらなる調査が必要である。

3.2 限界節における与格動作名詞

前節では、目的節および主動詞において、19 世紀末以降 supine の使用が拡大し、それと同時に与格動作名詞の使用が縮小していると述べたが、与格動作名詞に限って見ると、前節で検討した場合だけでなく、全般的に使用が縮小してきている可能性が高い。与格動作名詞は、限界節（時間あるいは程度の限界を表す副詞節）の述語としても用いられる。これは supine にはない与格動作名詞の用法である。しかし、限界節における与格動作名詞の使用例も 19 世紀末のテキストの方が多く、20 世紀半ば以降のテキストではほとんど見られないのである。

Jochelson（1900）には、限界節の例が 7 例あり、そのうち 5 例では与格動作名詞が、2 例では後置詞 *laŋi*/*laŋin*/*laŋide*「〜の方へ」を伴った動作名詞が用いられている。そのうちの与格動作名詞の例を 3 例、(37)〜(39) に、*laŋi*/*laŋin*/*laŋide* を伴った動作名詞の例を 1 例、(40) に示す。(37) は同一名詞句削除が適用された、つまり、限界節の明示されない主語が主節の主語と同一指示の例である。(38) と (39) は、同一名詞句削除が適用されない、つまり、限界節中に主語が明示された例である。(39) では、限界節の述語末尾の *-d-in* を 3 人称所有者標識に与格が続いたものであって、supine の *-din*/*-tin* ではないと見なしているが、これは、同一名詞句削除が適用されていないということ、および、主語が属格をとっていることによる[*13]。

(37) tabun-gele od'e-m [nume-ge **jaqa-l-ŋin**]
that.one-ACC drink-IND.TR.3SG house-LOC arrive-AN-DAT
「（彼は）それを飲んだ、家に着くまでの間」 （Jochelson 1900:59）

(38) [pon **juol'e-l-ŋin**] kimd'i-ŋi.
something get.dark-AN-DAT fight-PL:IND.INTR.3
「（彼らは）夜になるまで戦った」 （Jochelson 1900:32）

(39) t'uol'ed'i polut [amun-pe-de **eged-ei-d-in**] koude-m.
tale old.man bone-PL-POSS.3:GEN peep-PFV-POSS.3-DAT beat-IND.TR.3
「人食い鬼[*14]は（彼らの）骨が見えてくるまで（彼らを）殴った」 （Jochelson 1900:43）

[*13]動作名詞を述語とする節では、自動詞主語または他動詞目的語が属格をとることがある。詳しくは長崎（2016）における議論を参照されたい。

[*14]t'uol'ed'i polut は文字通りには「物語の老人」だが、コリマ・ユカギールの民話ではしばしば人を喰う化け物として登場する（「間抜け」「愚かな」という性格づけを伴うこともある）。よってここでは、和訳を「人喰い鬼」としておく。

(40)　[pon　**emide-l**　**laŋi**]　qaŋi-nunu-i.
something　grow.dark-AN　towards　chase-HBT-IND.TR.1PL
「夜が更けるまで（私たちは）追いかけたものだ」　（Jochelson 1900:175）

一方、20 世紀半ば以降のテキストでは、限界節の例を 7 例確認することができるが、与格動作名詞が用いられた例は、(41) に示した 1 例のみであり、残る 6 例はすべて後置詞 *laŋi*/*laŋin*/*laŋide*「〜の方へ」を伴った動作名詞が用いられているのである（そのうち 1 例を (42) に示す）。

(41)　qojl-get　nie-nu-k　[jān　pod'erqo　**gudel'e-d-in**]
God-ABL　beg-IPFV-OPT.2SG　three　day　become-POSS.3-DAT
「神に乞え、三日経つまで」　（Nikolaeva 1989-1:112）

(42)　moj-ŋi-k　[met　**kelu-l**　**laŋi**].
hold-PL-OPT.2　1SG　come-AN　towards
「（それを）つかまえていろ、私が行くまで」　（Nagasaki 2015:61）

テキストの収集年代による限界節述語に現れる動詞形式と用例数の違いは、表 2 のようにまとめられる。

表 2　限界節述語としての「動作名詞 +*laŋi*/*laŋin*/*laŋide* と与格動作名詞の用例数

	動作名詞 +*laŋi*/*laŋin*/*laŋide* / 与格動作名詞
19 世紀末	2 / 5
20 世紀半ば以降	6 / 1

3.3 supine と主語・目的語の格標示を受けた動作名詞：supine の新たな用法

3.1 節では、supine と与格動作名詞との置き換えが可能な、目的節述語、主動詞、主節において拡張項の役割を果たす補部節述語について検討を行った。一方、主語あるいは目的語の役割を果たす補部節に現れた supine も、動作名詞との置き換えが可能である。ただし、このときの動作名詞は与格ではなく、補部節が主語ならば主格（ゼロ）、目的語ならば主格（ゼロ）、具格、対格のいずれかをとる。これらの格標示は、名詞句が主語あるいは目的語となるときと同じである（Krejnovič 1982:245-248, 253-256, 260-262、Maslova 2003a:325-338、Nagasaki 2011:237-238、長崎 2014）。以下、各例の a は補部節述語として supine が現れた例、b は同じ動詞の補部節述語として主語・目的語の格標示を受けた動作名詞が現れた例である。主格の動作名詞に現れる 3 人称所有者標識は *-gi*/*-ki* であり、*-de*/*-te* と形が異なるが、先行する動作名詞標識 *-l* はやはり脱落する。補部節述語となった動作名詞に現れた 3 人称所有者標識は、自動詞主語または他動詞目的語の人称を標示すること、動作名詞を述語とする節では、自動詞主語ま

たは他動詞目的語が属格をとる場合のあることに注意されたい[*15]。

(43) a. [tamun-pe nuk-telle ajī mieste **nuk-tin**] nadoŋō-j
that.one-PL find-SS.SEQ still place find-SUPINE be.necessary-IND.INTR.3SG
「（お前たちは）彼らを見つけて、さらに（彼らの住む）場所を見つけなければならない」 （= (16), Nikolaeva 1989:38）

b. [tude **nuk-ki**] nadoŋō-j.
3SG:GEN find-POSS.3 be.necessary-IND.INTR.3SG
「（お前たちは）彼を見つけなければならない」 （Nikolaeva 1989-1:38）

(44) a. met-in iŋli-t' [taŋide **qon-din**].
1SG-DAT be.fearful-IND.INTR.3SG there go-SUPINE
「私はそこへ行くのが怖い」 （Elicited）

b. met-in iŋli-t' [taŋide **qon-u-l**].
1SG-DAT be.fearful-IND.INTR.3SG there go-E-AN
「私はそこへ行くのが怖い」 （Elicited）

(45) a. [**n'e=ohō-din**] lorqaj-m, [**n'e=modo-din**]
EMPH=stand-SUPINE be.unable.to-IND.TR.3SG EMPH=sit-SUPINE
lorqaj-m, …
be.unable.to-IND.TR.3SG
「（彼は）立っていることもできなかった、座っていることもできなかった」
（= (20), Nagasaki 2015:46）

b. [**ūj-l-e**] lorqaj-nu-l'el-u-m.
work-AN-INS be.unable.to-IPFV-INFR-E-IND.TR.3SG
「（彼は）働くのが困難だった」 （Nikolaeva 1989-1:114）

(46) a. tudel [**jard'i-din**] lejdī-m.
3SG swim-SUPINE know-IND.TR.3SG
「彼は泳げる」 （Elicited）

b. …, tudel lejdī-m [ōžī-ge **ejre-l-e**]
3SG know-IND.TR.3SG water-LOC walk-AN-INS
「…、彼は水の上を行くことができる」 （Nikolaeva 1989-1:36）

[*15]動作名詞を述語とする節における自動詞主語または他動詞目的語の属格標示に加えて、3 人称所有者標識による一致についても、長崎（2016）における議論を参照されたい。

(47) a. tudel omoluhī-m [tamun **nide-din**].
3SG be.ashamed.of-IND.TR.3SG that.one speak-SUPINE
「彼はそれを口に出すのを恥ずかしがっている」 (Elicited)

b. met terike [**šög-u-l**] omolohī-t el=šöu.
1SG wife enter-E-AN be.ashamed.of-SS NEG=enter(IND.INTR.3SG)
「私の妻は（家に）入るのを恥ずかしがって、入ってこない」
(Nikolaeva 1989-1:54)

(48) a. tudel [**egie-din**] kellugī-m.
3SG get.up-SUPINE be.dull.for-IND.TR.3SG
「彼は立ち上がるのを面倒くさがっている」 (Elicited)

b. taŋ pajpe [**modo-l-o**] kellugī-m.
that woman sit-AN-INS be.dull.for-IND.TR.3SG
「その女は座るのを面倒くさがっている」 (Elicited)

主格、具格、対格の標識が supine の成立とは無関係であることを考えると、上の例のような supine と主語・目的語の格標示を受けた動作名詞の共存は、supine と与格動作名詞の共存とは異なり通時的な理由をもたないため、奇妙に思われる。また、この共存は 20 世紀半ば以降のテキストと聞き取り調査では確認できるが、19 世紀末のテキストでは確認できない。Jochelson（1900）には、本節で問題とするタイプの補部節（つまり、主節において主語・目的語の役割を果たし、同一名詞句削除が適用された補部節）の例が 10 例見い出されるが、10 例すべてで補部節述語として現れているのは動作名詞であり、supine が現れた例は存在しないのである。以下に Jochelson（1900）からいくつかの例を示す。

(49) nadobne [**kudede-gi**].
necessary(Rus.) kill-POSS.3
「（私たちは）彼を殺さなくてはならない」 (Jochelson 1900:32)

(50) met [legul **nuk-ki**] l'orqai-l-ā, …
1SG food find-POSS.3 be.unable.to-E-INCH(IND.TR.1SG)
「私は食料を見つけることができなくなった」 (Jochelson 1900:34)

(51) [āt'e-ge **imo-l**] el=lejdi-je, jondo.
reindeer-LOC sit.on-AN NEG=know-IND.INTR.1SG forget(IND.TR.1SG)
「（私は）トナカイに乗ることができない、忘れてしまった」 (Jochelson 1900:167)

(52) tet t'at'a-ŋin mon-k: "pod'erqo-mo [**modo-l**] kelugi-t
2SG elder.brother-DAT say-OPT.2SG day-TMP sit-AN be.dull.for-SS

igde-me-bod-ek.”

catch-PTCP.1SG-NMLZ-PRED

「お前の兄に言え –（私は）日中に座っているのが退屈で、（それを）縫ったのだと」

（Jochelson 1900:45）

本稿で資料として用いた 20 世紀半ば以降のテキストには、問題としているタイプの補部節の例が 13 例あり、そのうち 6 例では supine が、7 例では動作名詞が用いられている[*16]。テキストの収集年代による動詞形式と用例数の違いは、表 3 のようにまとめられる。

表 3　主語・目的語の役割を果たす補部節述語としての supine と動作名詞の用例数

	supine / 動作名詞
19 世紀末	0 / 10
20 世紀半ば以降	6 / 7

19 世紀末と 20 世紀半ば以降という 2 つの時期の間に見られるこのような違いは、主語あるいは目的語の役割を果たす補部節述語としての supine の使用が新しいもので、19 世紀末以降に登場したことを示唆する。筆者は、その要因は純粋な言語内部の変化にあるというよりは、ロシア語との接触の結果である可能性が高いと考える。ロシア語の動詞の不定形は *Ja poshel kupit' xleba*「私はパンを買いに行った」のような目的節述語としても、*Ya gotovilsja uxodit'*「私は出かける準備をした」あるいは *Mne nado idti*「私は行かなければならない」、*Ja umeju plavat'*「私は泳げる」のような補部節述語としても広く用いられる。また、コリマ・ユカギール語話者の間では、20 世紀、特にソ連時代に入ってからロシア語とのバイリンガルが急速に広がったと考えられる。とすると、ロシア語の不定形の用法からの影響で、コリマ・ユカギール語に元々存在した目的節述語機能や拡張項的な補部節の述語機能をもつ動詞形式を主語・目的語的な補部節の述語として用いるようになったと仮定することができる。

その一方で、Haspelmath（1989）は動詞の不定形に関連する図 1 のような文法化過程を提案している。

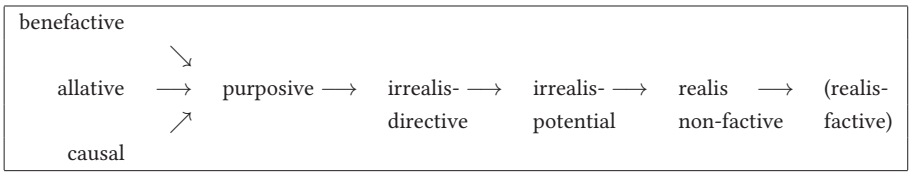

図 1　Semantic grammaticization of the infinitive (Haspelmath 1989:298(Figure 2))

[*16]動作名詞の用例には、*erū-*「悪い」、*iŋi-*「恐れる」が主節述語となった例も含めている。これらが supine と共起した例は得られていないが、2.4 節で述べた補部節述語の意味特徴から、supine と共起することも可能であろうと判断した。

これは、方向・受益者・原因を表す形式が現実・叙実的モダリティーを表すようになるまでに、いくつかの異なった意味標示機能を経てゆく過程であるが、その中で、purposive と irrealis-directive（manipulative あるいは desiderative な意味をもつ動詞の補部節）、さらに irrealis-potential（modal あるいは evaluative な意味をもつ動詞の補部節）が隣接して位置付けられている。

Haspelmath（1989）はこの文法化過程を通言語的、普遍的なものとして提示しているが、もしそうであれば、コリマ・ユカギール語の supine における目的節述語から補部節述語への機能の拡大が言語内部の変化、つまり、意味的な関連性の近さに基づく類推によって生じたという可能性も完全には排除できない。ただし、このような意味的関連の近さがロシア語の不定形的な supine の使用の出現を後押ししたということも考えられる。

4 まとめ

本稿ではコリマ・ユカギール語の supine の統語機能と 19 世紀末以降の supine の使用に見られる変化について考察し、以下の点を指摘した。

I. supine の統語機能は、(A) 目的節（目的を表す副詞節）の述語、(B)「主動詞＋補助動詞」の構造における主動詞、(C) 補部節の述語、の 3 つに大きく分類される。(C) はさらに、(C-1) 自動詞主語の役割を果たす補部節の述語、(C-2) 他動詞目的語の役割を果たす補部節の述語、(C-3) 拡張項の役割を果たす補部節の述語、に分類される。

II. (A)、(B)、(C-3) の supine は 3 人称所有者標識を伴わない与格動作名詞と置き換えが可能である。このような supine と与格動作名詞の共存は、supine が「3 人称所有者標識＋与格」における 3 人称所有者標識の人称標示機能の形骸化によって成立したことと関係している。この共存は、20 世紀半ば以降のテキスト資料でも 19 世紀末のテキスト資料でも確認できるが、2 つの時期の間で、与格動作名詞の使用が縮小し、supine の使用が拡大していることが観察される。

III. (C-1) と (C-2) の supine は主語・目的語の格標示を伴った動作名詞と置き換えが可能である。しかし、このような 2 つの動詞形式の共存は、II のような通時的な理由を持たない。また、主語・目的語の役割を果たす補部節の述語に supine が現れた例は 19 世紀末には見られず、それ以降に出現した新たな用法である可能性が高い。この新たな用法の出現は、純粋な言語内部の変化というよりは、ロシア語との接触による影響の結果と考えられる。

資料

Jochelson, Waldemar（1900）*Materialy po izučeniju jukagirskogo jazyka i fol'klora, sobrannye v Kolymskov okruge.* St Petersburg.（Reprinted by Bičik in Yakutsk, 2005）.

Maslova, Elena（ed.）（2001）*Yukaghir Texts.* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Maslova, Elena（2003a）*A Grammar of Kolyma Yukaghir.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
Nagasaki, Iku（ed.）（2015）*Materialy po jazyku jukagirov verxnej Kolymy.* Tachikawa.
Nikolaeva, Irina（ed.）（1989）*Fol'klor jukagirov verxnej Kolymy*, vol. I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.

参考文献

Comrie, Bernard（1976）*Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.
Dixon, Robert M. W.（2006）Complement clauses and complementation strategies in typological perspective. In: Robert M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald（eds.）, *Complementation: A Cross-Linguistic Typology*, 1–48. Oxford: Oxford University Press.
Dixon, Robert M. W.（2009）*Basic Linguistic Theory.* Oxford: Oxford University Press.
Haspelmath, Martin（2009）From purposive to infinitive - A universal path of grammaticization. *Folia Linguistica Historica* 23:287–310.
Jochelson, Waldemar（1905）Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist* 7: 369–424.
Krejnovič, Eruxim A.（1982）*Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku.* Leningrad: Nauka.
Maslova, Elena（2003a）*A Grammar of Kolyma Yukaghir.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
Maslova, Elena（2003b）*Tundra Yukaghir.* Munich: LINCOM Europa.
Nagasaki, Iku（2011）Kolyma Yukaghir. In: Yasuhiro Yamakoshi（ed.）*Grammatical Sketches from the Field*, 213–256. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
長崎郁（2013）「コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式：分詞の統語機能と形態」『北方言語研究』3:41–54.
長崎郁（2014）「コリマ・ユカギール語における名詞項標示」『北方言語研究』4:19–31.
長崎郁（2016）「コリマ・ユカギール語の非定形節における能格性」『北方言語研究』6:25–42.
Noonan, Michel（2007）Complementation. In: Timothy Shopen（ed.）*Language Typology and Syntactic Description*, Vol. 2. Complex Constructions, 2nd Edition, 52–150. Cambridge: Cambridge University Press.

Supine in Kolyma Yukaghir: Syntactic Functions and Language Contact

Iku Nagasaki
(Nagoya University)

The supine of verbs in Kolyma Yukaghir appears in three different syntactic environments (Jochelson 1905, Krejnovič 1982, Maslova 2003a): (A) the predicate of a purposive adverbial clause, (B) the main verb in the prospective-aspect construction, and (C) the predicate of a complement clause. Among these three syntactic functions, the latter can be further divided into three: (C-1) the predicate of an S-complement clause, (C-2) the predicate of an O-complement clause, and (C-3) the predicate of an E-complement clause (S = intransitive subject, O = object, E = extended argument).

The supine of (A), (B), and (C-3) can be replaced with the dative action nominal of verbs, which lacks the third-person possessor, as described in previous studies. This coexistence of the two verbal forms can be explained by the origin of the supine. That is, the supine suffix *-din*/*-tin* is in fact the "frozen" combination of the third-person possessor *-de*/*-te* and the dative *-(ŋ)in*. The coexistence is more clearly observed in the texts collected at the end of the 19th century than those collected after the middle of the 20th century, in which the use of the dative action nominal is quite rare. Thus, it can be stated that instead of the dative action nominal, the supine has become increasingly widespread.

The supine of (C-1) and (C-2) can be replaced with the action nominal marked by the same case markers as those used for nominal subjects and objects. The coexistence of the supine and the action nominal with subject/object case marking is odd because it has no diachronic ground. In addition, there are no instances of the supine used as the predicate of an S-/O-complement clause in the texts of the 19th century, which leads to the consideration that these functions are novel. The emergence of the new functions of the supine might be a result of the language contact of Kolyma Yukaghir with Russian, which had become closer in the 20th century, rather than a solely internal change.

（ながさき・いく　inagasaki@free.fr）